

いつの時代も若者の強い興味対象である「ファッション」。
 通学にどんな服を着ればいいのかと悩む新入生はきっと多いことでしょう。今号では塾生のファッション観や月々の服飾費などの「実態」をリサーチ。お金をかけずにオシャレを楽しむ工夫や努力とは？
 また、後半では過去の塾生のファッションの移り変わりや、今も受け継がれている学生服にまつわるあれこれもご紹介します。

現代編 「塾生の通学コーディネートを考える」

塾生が1カ月あたりにかける服飾費*の平均（*アクセサリー等含む）



※調査は2010年度（2010年6月）実施 ※有効回答数1,769名

「慶應義塾大学学生生活実態調査」報告によると、塾生の毎月の服飾費は男女、自宅内外通学にもよりますが、8000円〜1万1000円程度。近年の経済状況、そして、ファーストファッション店の相次ぐ出店もあってか、ここ数年、洋服、アクセサリーにかける金額はやや減少傾向にあるようです。

でも、限りある予算の中で、やっぱりおしゃれを楽しみたいのは、昔も今も同じ。

高校生活まで制服で過ごし、これから毎日の私服をどうしようかと考えている新入生も多いはず。今回は、義塾の学生サークル Fashion



コーディネート の条件

- 靴、バッグは自分の手持ちのものを使用。
- トップス、ボトムなど、自分の「お気に入り」のものとあわせてアレンジ。
- 「春先に、新入生が日吉キャンパスに通う通学ファッション」をテーマに、予算1万1000円（女性の平均額）で買い足してお買い物。コーディネート自らモデルとなって披露。

Creatorのメンバーに協力してもらい、次の条件でコーディネートアドバイスをしてもらいます。また、彼らなりのこだわりや、キャンパス内のファッション事情についても聞いてみました。



今回登場してくれた
2人が所属するサークル

Fashion Creator

大学の公認学生団体で、慶應義塾大学の学生のみで構成されている団体。服飾専門学校にて週1回服飾製作を学んでいる。年2回のショーおよび展示会の企画・運営が主な活動。



明るい水色のコート。
前から持っていました。
お気に入り。



丸井のセールで買ったワンピース。
9450円。



表参道の JOURNAL STANDARD で購入したもの。

【経済学部3年】

なかむらさりーな 中村紗麗奈君のコーディネート

新入生ファッションを意識しました。ひざ上までの長いブーツに合わせて、短め丈の春色のワンピース。ウエストにゴムが入っていて丈の調節ができるのが便利。YUKI TORIIのコートは母に買ってもらいました(笑)。母世代向きのブランドですが、色も素材感もすてきでコーディネート工夫すれば私たちでも楽しめます。ベルトは目立ち過ぎず、でも個性の。明るい茶色でいろいろな服に合わせやすいですよ。

Another Style



Another Style

足首をちょっと出せるのが楽しいサルエルパンツ。ヘイズリー柄でくしゃくしゃとした質感がいい感じ。ウエストを高くしてサスペンダーで留めるのがポイント。帽子はちょっと勇気があるけれど注目度が上がります。白シャツに高校時代の制服を使うのも手です。



定価の半額で買ったサルエル
パンツ。自前です。



青山通りのセレクトショップ・
リコルディで買った帽子。



古着屋さんで買った500円の
サスペンダー。

「開放的な日吉に比べて、三田は落ち着いています。着ている服のカラートーンがぐっと地味。就活で忙しいことや歴史的な建物が多いことも関係しているのかもしれない」(小口君)

「日吉では、これまで受験勉強に一生懸命だった女子が、入学するとだんだん自由で個性的なファッションに変わっていきます。三田に進むと、遊びが少なめでシンプルになりますが、すてきな着こなしの人もたくさんいます」(中村君)

ちなみにSFCには、パーカーなどのカジュアルウェアにこだわっている人が多い印象があるそうです。

個性的なファッションは
自分も周囲も元気にさせる

身だしなみも大切ですが、無難な服ばかり着ていては楽しくありません。

「気に入った個性的な服を着ると、元気になるります」(小口弘太郎君)、「こだわりのあるファッションは自分も、周りの人も楽しくします」(中村紗麗奈君)というふたりに、キャンパスファッションを分析してもらいました。

ジャンルを決めて揃える (小口君)
春夏物を買う焦らないで (中村君)

小口君のファッション進化の手掛かりは、ショップの人との会話です。

「服も人もたくさん見ているから、情報量がすごい。気軽に話しながらいろいろ教えてもらいました」

「女性は誰しも体形やサイズにどこかコンプレックスを持っています。それをショップの人にざつくばらんに話すと、いいアドバイスがもらえます。また、着たことがないタイプの服でも、勇気を出して試着すること。私は試着室の中で殻を破って突き抜ける感覚を、何度も味わいました」と中村君。

「僕はスカートを初めてはいたときに、突き抜けました(笑)」(小口君)

最後にファッションアドバイスを。

「ナチュラルやトラッドなど、ジャンルを決めて買うと、統一感のあるコーディネートができます」(小口君)

「新入生は、春服をたくさん買ってもすぐに夏になるので、買い過ぎに注意。また、気合を入れて夏服を買っても、夏休み期間が長いので、見せる友人がいまません。そのぶん節約して、秋冬用の大物を買うのがいいのでは」(中村君)

[経済学部3年]

小口弘太郎君のコーディネート

ファッション過激派を自任する僕にしては、おとなしめのコーディネート。全体的に古着でまとめました。黒のスキニーパンツは何にでも合わせやすい基本アイテム。これは古着ですが、ファストファッションのショップでは3000円ぐらいで買えます。Tシャツもカーディガンも古着ですが、くたびれてなくて清潔感があります。胸に留めている蝶ネクタイは遊び心のアクセント。注目してほしいのはバッグ。アシンメトリーの不思議な形状を一目で気に入り買いました。



自前のお気に入りのジャケット。



下北沢で見つけた古着のカーディガン。1500円。



穴があいているダメージ感がいいTシャツ。3500円。



原宿の古着屋で買ったスキニーパンツ。6000円。



ワンタッチで留められている遊べる蝶ネクタイ。

Another Style

スコットランドの民族衣装でもあるスカートは、チャレンジ心を楽しめる新しい男性のトレンドです。2010年の春夏コレクションからは各ブランドでも多く見られるようになりました。



歴史編

「塾生ファッションの変遷と学生服」



福澤先生の
平民主義の影響が
明治初期は、
商人風の着流し

現在、義塾の各キャンパスには色とりどり、思い思いの服装の塾生たちが行き交っています。では明治初期の塾生たちは、どんな服装で通塾していたのでしょうか。

洋服？それとも学生服？ 実は、ほとんどの塾生が、和服をさらりと着流して、角帯を締めていました。一見商人風のその姿は、福澤先生の平民主義の考えが反映されていたようです。

少し時代が下った1885(明治18)年、塾生の間で洋服着用が一気に広がったことがありました。塾生たちが申し合せて揃いの

洋服と帽子を誂え、着用し始めたことが当時の時事新報で報じられています。彼らの自発的な行動が、洋服化へのひとつのきっかけとなったのです。

それから15年後の1900(明治



1894(明治27)年の大学部文科学科生。ほとんどが和服の着流しだが、一部詰襟に角帽の塾生も。

33)年、義塾当局より塾生の服装について以下の方針が告示されました。すなわち、「一、普通部(当時の制度で大学に進む前の課程) 生徒登校の際は必ず制服制帽を着くべき事。一、大学部生徒登校の際は必ず洋服着用、ただし徽章附の帽子を着くべき事」との内容でした。

当時はまだ和服を着る塾生も多かったようですが、羽織も袴も着用せずにだらしなく着崩す者や、着流しに角帯を被る者など、必ずしも端正とは言えない格好で過ごす者が少なくなかったようです。この時期は自治活動が高まりつつあり、塾生の間でも彼らの有り様を良しとせず、綱紀肅正を求める空気の中で示された方針でした。

この告示以降、普通部は詰襟の制服が徐々に定着。一方、大学部は洋服着用ということで、必ずしも制服でなくてもよかつたようです。

ユニークな「衣服仕立局」
普通部が起源の「丸帽」

ところで、文明開化のただなかにあつた1872(明治5)年8月、三田の慶應義塾内において「衣服仕立局」という、衣服製造所が設立された記録



1905 (明治 38) 年の大学部政治科卒業生。詰襟が増え、卒業写真のせいが、和服は袴着用が多い。

ないことを指摘し、せめて義塾の内だけでも女性たちに職業の場をつくり、収入確保と地位向上を図る場としたいという目的が記されています。ま

は、ほんの一時期ですがユニークな「衣服仕立局」が存在しました。さて、大正時代になると、「登校の際は洋服」と決められていた大学部本科(専門学校令により当時の大学部は予科2年、本科3年)で再び和服が増えはじめます。そこで1918(大正7)年頃より、本科において詰襟・角帽の制服への統一が図られました。しかしながら、いかにも仰々しい角帽は塾生に人気がなく、代わりに底がまっ



戦後、1963 (昭和 38) 年の経済学部卒業生。スーツ姿が増え、学生服でも下はグレーの替えズボン着用が多い。

※写真は福澤研究センター所蔵

が残っています。出資したのは福澤先生。アメリカから裁縫機械(ミシン)2台を輸入し、洋服を主に和服も仕立て、洗濯や洗いや張りも請け負う、画期的なものでした。その開業引札(広告)には「洋服の便利なるは今更いふに及ばず。然るに……」と洋服の高価過ぎることに異議を唱え、「我が仕立場にて製する洋服は中等以下世間の日用に適」するものであるとうたい、洋服の普及を目指すことを宣言しています。

その後続く「仕立場を開きし趣旨」では、都会に暮らす女性は、田畑仕事に精を出す農村の女性と異なり就くべき職業がないばかりに、「ひたすら男子に依頼して衣食を求め」ざるを得



1921 (大正 10) 年の大学部政治科卒業生。ほとんどが詰襟で、丸帽のほか、中折れ帽や鳥打ち帽(ハンチング)の学生がいる。

さに独立自尊の信念を地でいく、いかにも福澤先生らしい事業といえるでしょう。

カ月後の10月、立ち上げを主導した先生はこの事業を古い門下生である早矢(はやや)仕有的(しゆてき)丸屋裁縫店として営業されました。先生が自らの出資できっかけをつくり、門下生がその意志を受け継ぐという連携プレーにより、三田山上の学び舎には、ほんの一時期ですがユニークな「衣服仕立局」が存在しました。

すぐで、上部が波打っている独特の丸帽(5ページ右上)が流行し、大学部でも定着しました。この丸帽は普通部生が被りはじめたといわれています。また大正末年頃から、通常より襟が低い詰襟制服(襟高約3cm)が着用されるようになり、その後続く「丸帽と低い襟の学生服」という塾生のスタイルが確立しました。またその襟に、学部や学年を示す襟章を付けないことが、塾生らしいおしゃれの流儀となりました。その後、義塾は1940(昭和15)年に初めて制服制帽の形状を明文化。塾生が自発的にスタイルを確立し、当局が追ってこれを認めるといふスタンスは、いかにも独立自尊の慶應義塾らしいといえるでしょう。

現代の学生服

かつては全塾生が着用していた詰襟の制服も、現在は体育会部員と應援指導部員が着用しているのを目にするだけになりました。

とくに應援指導部では、制服こそが日々の服装。1933（昭和8）年の創部以来の長き伝統を文字通り体現するものであり、テスト前の私服許容期間を除き、通学時もキャンパスでも男子部員全員が、常に制服姿です。

「制服が目立つ時代。街で塾員の方から声をかけていただくこともあり、うれしいと同時にきちんとしなければと身が引き締まります」。そう語るのは應

援指導部リーダー部責任者の星勝晃君（経済学部4年）。

同部東京六大学応援団連盟常任委員の鈴木悠史君（医学部4年）は「應援指導部員は塾生の模範たれ、というのが伝統。その自覚のもとに、制服はまめにクリーニングに出し、清潔に保っています」とのこと。

義塾の制服は今も三田周辺のテラーで取り扱っており、彼らに限らず一般の塾生もオーダーすることができます。



左から2人目が鈴木君、同3人目が星君。

Column

もう一つの制服、

医学部「白衣式」

薬学部「白衣授与式」



医療に携わる人にとっての制服といえるのが白衣です。医学・薬学を学ぶ塾生にとっても、白衣は志した道に踏み入るための象徴的な存在です。

医学部では、4学年を修了し、臨床実習が始まる前に「白衣式」が行われます。医療のプロフェッショナリズムを意識させるために米国で始まったもので、医学部では2006年（87回生）が第1回です。

薬学部薬学科の「白衣授与式」は、5学年になり、病院・薬局での実務実習が始まる前に举行されます。

どちらの式においても、人の命に携わる職業の責任の重さを胸に、授与されたばかりの白衣をまとして、塾生による「誓いの言葉」が宣誓されます。